8/15
早稿

語り継ぐ 2016 ふくい ③

苦難生き抜いた義母

篠原 憲司さん(69)＝敦賀市

仲間に火がつけられるのを見せられたり、黒髪を切って男装して逃げたりした女性たち。敗戦直後の旧満州（中国東北部）で、苦難を生き抜く姿が伝えられていく。十一日、おおい町郷土史料館であった戦争を語る会。「どんな時でも希望を捨てないというのが母の教えだった」。篠原憲司さん(六九)＝敦賀市清水町＝は初めて人前に立ち、義理の母・愛子さんの戦争体験手記について語った。

手記は「あゝ北満の花よ」。敗戦が色あせてきた一九五五（昭和三十）年に愛子さんが自費出版した作品を、篠原さんが復刻した。きっかけは昨年一月、九十一歳で他界した愛子さんの遺品を整理するうち、洋室の本棚から出てきた古びた手記「世紀の悲哀」にあった。

開くと、愛子さんが二十一歳のころ、興亜報国農場女子奉仕隊の一員として嶺南地域の二十歳前後の女性約七十人とともに、旧満州に渡ったときの体験がつづられていた。

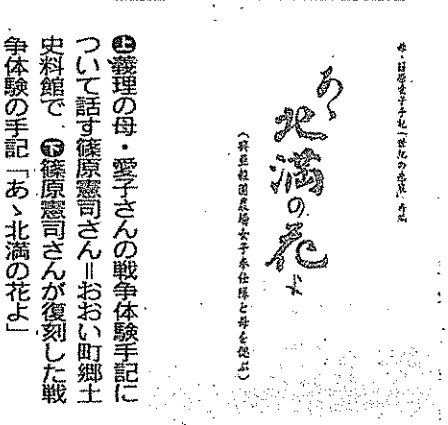
終戦を迎え、現地の国民学校の校長に命を絶つよう促されたり、銃を持つ盗賊に対して石を投げて戦ったり。「澄ちゃんの御両親にこの事を告げる日の事を思うと胸が痛む」。現地人に竹やりで腹などを刺された十七歳の少女が、二十日間近い看病のかいなく息を引き取ったときの辛さもにじむ。

愛子さんは旧満州で一年以上過ごし、四六年十月に再び故郷の旧三方町（若狭町）の地を踏んだ。過酷さをあらためて知り、篠原さんは「屈辱と迫害を受けても折れない心に勇気付けられる。子どもたちに伝えたい」と感じた。

建築会社を経営する傍らで、愛子さんの次女で妻の京子さん(六七)と復刻作業に入った。旧字体を現代仮名遣いに直し、使い慣れない言葉には意味を添えた。図書館で歴史を調べたり、生存者に連絡したりして奉仕隊の名簿も掲載。戦後七十年の昨年八月に「あゝ北満の花よ」と題してよみがえらせた。

町図書館から依頼を受け、初めて「語り部」を引き受けた。集まった中学生ら三十人ほどを前に「商売で失敗をしても、母は『命まで取られない』と励ましてくれた」と長く同居した愛子さんの人柄に触れつつ、胸の内を吐き出した。

「戦争の悲惨さだけでなく、力強く生き抜く心の大切さを知ってほしい。そうすれば、亡くなった人たちも喜んでくれると思う」。今後も語り続けるつもり。初舞台を終えた晴れやかな表情に使命感をにじませていた。（古根村進然）



㊤義理の母・愛子さんの戦争体験手記について話す篠原憲司さん＝おおい町郷土史料館で。㊦篠原憲司さんが復刻した戦争体験の手記「あゝ北満の花よ」